

小川政弘作 「クリスマス・キャロル物語 - 鳴らないオルガン -」

<前編>

(音楽) 「きよし この夜」(日本語 原曲)
ナレーション いかがでしたか？ 世界中で、この曲を知らない人はいないと言っても言いすぎではないほど有名な、クリスマス・キャロルのナンバーワン、「きよし この夜」でした。

きよし この夜
星は光り
救いのみ子は み母の胸に
眠りたもう 夢やすく

本当に素朴で美しい、しかもメロディーと歌詞がピッタリと溶け合った名曲ですね。

でも、音にはちょっとうるさい君、いつも聞き慣れたメロディーとは、ところどころ、少しずつ違うのに気づきましたか？ そう、今お送りしたのが、実はこの曲の原曲、初めに書かれた楽譜どおりのメロディーなのですね。長い間、世界中で歌い継がれていくうちに、少しずつ変えられて、今日のようなメロディーになったのです。それにしても、このクリスマスになくはならない名曲は、いつ、どのようにしてこの世に誕生したのでしょうか？ そして、どのように世界中に広まっていったのでしょうか？――

(効果音) (戸外。小鳥のさえずり。教会の鐘。)

ナレーション ここは、オーストリアの、深い山々に囲まれたチロル地方。一年中雪を頂くチロル連峰が、冷たい澄み渡った空にそびえ立つように見守っている山間やまあいに、オーベルンドルフという小さな村がありました。時は今からざっと170年ほど前の1818年、クリスマス・イブのことでした。

モール ああ、今年もクリスマスだ。今ごろは、フランツが、教会で明日のクリスマス礼拝の賛美歌のオルガンを一生懸命練習しているころだろう。神様が、私たちのためにご自身のみ子をお送りくださった。このクリスマスのすばらしい訪れを、世界中の人々に知ってもらえるようなキャロルをなんとか作れないものだろうか？ これが、フランツとわたしの長い間の夢だったのだが。今年もまたこの季節を迎えてしまった。

ナレーション 声の主は、ヨーゼフ・モール。この村の聖ニコラス教会の司祭で、その時はまだ26歳の若き青年でした。フランツというのは、フランツ・グルーバー。31歳の

小学校の先生で、聖ニコラス教会のオルガニスト。司祭のモールとは親友で、音楽好きの二人は、時にはグルーバーの伴奏でモールが歌い、時には二重唱をして、村の人々に神を賛美することのすばらしさを教えていたのです。

モール(モノローグ) さて、ベームさんのところの家庭集会も終わったし、帰るとしよう。だが、明日のクリスマスまでまだ1日ある。今夜、もし今夜、わたしがクリスマスの詩を書いて、明日までにフランツが作曲してくれたら、明日の礼拝では村の人に新しいキャロルを歌ってあげられるんだが。…そうだ、少し回り道だが、オーテンバークの丘を歩いていこう。あそこからは、オーベルンドルフの村が一目で見渡せる。夜空の中で、村の人々一人一人のことを思いながら、神の愛について思い巡らしたら、あるいは何かすばらしい詩が書けるかもしれない。

ナレーション こうしてモールは、一人オーテンバークの丘に立ちました。目を上げると、降るような無数の星が一つ一つ輝いていました。魂が吸い込まれていきそうな夜の静寂の中に、はるか眼下遠くに流れるザルザッハ川のささやきが、かすかに風に乗って伝わってくるのです。後ろには、夜目にも白い雪を頂いた山々が、この村里をすっぽりと包み込むようにそびえていました。

モール(モノローグ) なんという静けさ、なんという平和だ！ みどり児は、我らの主は、この世に生まれたもうたのだ。あの天のみくらを降りて、この地上に下りたもうたのだ。おお、主よ！

ナレーション モールの心は、いつしか2000年前の、あのベツレヘムの馬小屋に導かれていました。

モール(モノローグ) きよし この夜 星は光り
救いのみ子は み母の胸に
眠りたもう 夢やすく
——これだ！
きよし この夜
み告げ受けし… (FO)

ナレーション モールは、なんとも言えない胸の高鳴りを覚えながら、道々、わき出てくる詩の一節一節を口ずさみながら、山を降りたのです。家に戻り、一気に歌詞を書き留めたモールが礼拝堂に行ってみると、思ったとおりグルーバーはオルガンのところにいましたが、一向にオルガンの音は聞こえません。

モール やあ、フランツ。いよいよ明日だねえ。遅くまでご苦労さん。

グルーバー やあ、ヨーゼフ。それが、困ったことになった。オルガンが鳴らないんだ。

モール オルガンが鳴らない？ だって、先週までは大丈夫だったじゃないか。どうしたんだろう。どれ、見せてくれ。

ナレーション オルガンは、モールが力任せにペダルを踏んでも、スースー空気が漏れるような音がするばかりで、少しも鳴りません。

モール おかしいなあ。こんなスースー音が出るということは…。あれ、もしかして。フランツ、ちょっと手を貸してくれ。中の空気袋を見てみよう。

グルーバー よし、じゃ動かすぞ。よいっしょ、よいっしょ。…あ、こりゃひどい。これじゃ鳴らないわけだ。

モール やっぱりそうか。このごろネズミが増えて困ったと思ってたんだが。

ナレーション そうです。ネズミがオルガンの中に潜り込んで、空気袋に穴を開けてしまったのです。

グルーバー どうする、ヨーゼフ？ これではオルガンは無理だ。こんなにひどく食いちぎられては、空気袋をそっくり取り替えない限り直らない。だが修理やさんのマウラヒャーが来るのは来年の春だ。とても明日のクリスマスには間に合わないよ。

モール うーん。音楽なしのクリスマスなんて、まるで灯が消えたような寂しいものだろう。困ったなあ。せつかく、わたしがたった今、新しいクリスマスの歌を書いたのに。これに、君の手で、すばらしい曲を作ってもらおうと思ったのに。なんということだ…。

グルーバー 本当か?! 新しい歌を書いたのか。どれ、見せてくれ。

ナレーション モールは、長い間二人で祈ってきたことを、今年こそかなえたいと思って、オーテンパークの丘に登ったこと。そこで見たすばらしい光景の中で、2000年前のイエス様の生まれた夜に思いをはせながら、魂を揺り動かされる思いで、この詩を書き上げたことを、グルーバーに語りました。

グルーバー きよし この夜 星は光り
救いのみ子は み母の胸に
眠りたもう 夢やすく
——救いのみ子は み母の胸に
眠りたもう 夢やすく
…これだ、これだよ ヨーゼフ！
きよし この夜 み告げ 受けし
羊飼いらは み子のみ前に
ぬかずきぬ かしこみて
ヨーゼフ、やったね。これこそ本当のクリスマスの歌だ。神の救いを、主の愛を知らせる歌だよ！ ああ、これになんとかしてメロディーをつけたい。だが、このオルガンのほかに何がある？ わたしの家にある古びたギターぐらいのものだ。…ギター、ギターか！ そうだ、ヨーゼフ。この素朴な歌には、ギターの音色がふさわしいかもしれない。これからすぐ帰って、ギターで曲を作ってみよう。

モール フランツ、やってみてくれるか。ありがとう。わたしは、ここで祈りながら待っているよ。

ナレーション 　いつしか夜は白々と明け染めて、クリスマスの朝が来ようとしていました。村人がそろって礼拝をささげる時は、あと数時間後に迫っていたのです。

<後編>

ナレーション 　オーストリアはチロルの山里、オーベルンドルフの聖ニコラス教会の若き司祭ヨーゼフ・モールは、1818年のクリスマス・イブの夜、長い間祈っていた本当のクリスマスにふさわしい詩を完成したのです。

モール 　きよし　この夜　星は光り
救いのみ子は　み母の胸に
眠りたもう　夢やすく
…これだ！
きよし　この夜　み告げ　受けし
牧人たちは…（FO）

ナレーション 　そして、親友の小学教師で、教会のオルガニストであるフランツ・グルーバーに作曲してもらおうと思ったのですが、頼みの綱である教会のオルガンは——
グルーバー 　よし、じゃ動かすぞ。よいっしょ、よいっしょ。…あ、こりゃひどい。これじゃ鳴らないわけだ。

ナレーション 　音を出さず空気袋がネズミに食われて、オルガンは使い物にならなくなっていたのです。村人たちとともに祝うクリスマスを数時間後に控えて、グルーバーに残されていたのは、古ぼけた一台のギターだけでした。

グルーバー（モノローグ） 　読めば読むほどすばらしい曲だ。ヨーゼフの長い間の祈りが、今、聞かれたのだ。

STILL NACHT, HEILIGE NACHT!
ALLES SCHLÄFT, EINSAM WACHT
NUR DAS TRAUTE, HEILIGE PAAR,
HOLDER KNABE IM LOCKIGEN HAAR,
SCHLAFFS IN HIMMLISCHER RUH !

あのベツレヘムの馬小屋が、羊飼いたちの驚きと喜びの顔が浮かんでくるようだ。主よ、この詩にふさわしい曲を、我に与えたまえ。

（効果音） 　（ギターで和音をひきながら、一節、一節、曲をつけ、楽譜に書き取り、完成させてゆく。）

グルーバー 　できたぞ！
（冒頭の「きよしこの夜」をハミング）ラーララーラー、ラーララーラー、
星は光り…

ナレーション 　グルーバーは、できたばかりの楽譜とギターを小わきに抱えると、モールの待つ教会に、跳ぶように走っていきました。

グルーバー ヨーゼフ！ できたよ！ この曲は君の歌にピッタリだと思うな。

モール そうか！ よかった。早速聞かせてくれ。

グルーバー (ギターに合わせて)きよし この夜…

(効果音) (モール、途中からテナーの音で合わせる。)

モール すばらしい。なんて素朴で美しい曲なんだ。わたしがゆうべ、オーテンバークの丘に立って、この詩を書いていた時、わたしの心に浮かんだイメージにそっくりだよ。フランツ、ありがとう。本当にありがとう！

ナレーション その夜、凍りついた雪を踏みしめながら、大勢の村人が教会に集まってきました。その夜、聞きなれたオルガンは鳴りませんでしたが、グルーバーの奏でるギターに合わせて、モールと少年少女合唱隊のリードの下に、村人たちは、世界で初めての「きよしこの夜」を歌ったのです。

(音楽) (「きよしこの夜」)

ナレーション 礼拝が終わった時、人々は二人のもとに駆け寄り、口々に礼を言いました。彼らは目に涙を浮かべていたということです。

(音楽) STILL NACHT, HEILIGE NACHT!
ALLES SCHLÄFT, EINSAM WACHT
NUR DAS TRAUTE, HEILIGE PAAR,
HOLDER KNABE IM LOCKIGEN HAAR,
SCHLAFFS IN HIMMLISCHER RUH !

ナレーション こうして、この世に生まれた「きよしこの夜」でしたが、この曲が世界に広まるには、まだしばらくの時が必要でした。それどころか、この一枚の楽譜は、モールの机の中にしまい込まれ、そのままこの村里に埋もれてしまったかもしれないのです。この曲が再び世に出たのは、それから1年後、1819年11月のことでした。ツィルラータールのオルガンの修理職人、カール・マウラヒャーが、やっと修理にやってきたのです。

マウラヒャー やあ、先生。すみません、すっかり遅れちゃって。先生のお手紙で、空気袋がダメになったというんで、それが出来上がるのに手間取っちゃって。

モール ああ、カール、待っていたよ。お陰で1年たってネズミはやっといなくなったがね。早速T飲むよ。

ナレーション こうしてオルガンは再び元の美しい音色を出すようになりました。

マウラヒャー さてと、調子を試しますんで、何か楽譜はありませんか？

モール 楽譜か。フランツがほとんど家に持って帰っているんだが、さてと…。あ、そうだ、あれだ！

ナレーション モールは、あの「きよしこの夜」が机の中に眠っていたのを思い出したのです。グルーバーが弾き、モールが歌う「きよしこの夜」を聞いたマウラヒャーは、その素朴な美しさにすっかり魅せられてしまいました。

マウラヒャー 先生！ こんなすばらしいクリスマス曲があったんですか。これは、ここだけで歌っているのはもったいないですよ。グルーバーさん、わたしにこの楽譜を写してください。

ナレーション 彼は、感動して山を降り、それから数年間にわたって、チロル地方にこの歌を宣伝して歩いたのです。“よき訪れを告げる足”でした。

ストラッサー家の娘 1 さあ、明日はいよいよクリスマスよ。夢にまで見た大聖堂で歌うのよ。

娘 2 ライプツヒ大聖堂！ 何千という聴衆が集まる前で、わたしたちが歌えるなんて、夢のようね。

娘 3 思えば去年のクリスマスに、マウラヒャーさんからこの曲を初めて聞いてから、この日のために練習してきたんですものね。

娘 4 「きよしこの夜」、この歌を、集まったすべての人に覚えて歌ってもらいたいわね。

ナレーション 彼女たちは、ツィルラータールに住むストラッサー家の 4 人姉妹でした。4 人は、“ストラッサー 4 重唱団”として、当時のドイツの大商業都市、ライプツヒの大聖堂で、この「きよしこの夜」を歌ったのでした。1831 年、この曲が作られて 13 年目のことでした。

(音楽) (「きよしこの夜」4 重唱。デスカント付き)

(効果音) (大拍手)

ナレーション こうして「きよしこの夜」は、ストラッサー姉妹の演奏旅行で、ヨーロッパ各国からアメリカへ。1854 年には、ベルリンの皇帝教会の 100 人以上の大聖歌隊によって、皇帝ウィルヘルム 4 世の前でも歌われたのです。感激した皇帝の命により、この曲はすべての教会のプログラムの中で、第一の座を与えられることになったのでした。

(音楽) (日本語原曲→オーバラップして管弦楽曲で次のナレーションのBGMIに。)

ナレーション こうして「きよしこの夜」は、世界中に広まっていきました。でも、この曲は、作られて 40 年近くもの間、作曲者グルーバーの名は分からず、誕生の地名から「チロルの歌」と呼ばれていたのです。ハイドンの曲だとさえ思われていました。グルーバーの名は、長い間の調査の結果、あの 1854 年の御前合唱で初めて明らかになり、曲とともに、やっと彼の名にも栄誉が与えられたのです。でも、わたしたちは、この歌を歌うたびに、一切の人の世の思いを超えて、素朴なクリスマスの喜びに思いをはせたいものですね。あの 170 年前のチロルの村人のように、そして 2000 年前のあの夜、みどり児にお会いした羊飼いたちのように――。

(音楽) (次第に高まって――)

<完>